

お嬢様の異世界旅行

KKP110

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

退屈な日々を送る日常に嫌気が指したある日、レミリアお嬢様は思いつきでパラレルワールドへ行く事になるのだが…

目次

1話	退屈	1
2話	驚きとわくわく	
3話	新世界への一歩	
4話	未知との遭遇	
5話	面接	
6話	初仕事	
7話	地下からの挑戦	
8話	パーティー	
9話	いざ、人里へ	
10話	村の本屋さん	
11話	幻想郷での日常	
12話	文々。新聞	
13話	訪問取材	
14話	氷の妖精	
15話	いざ、館へ！	
16話	スペルカードルール	
17話	リベンジ	
18話	魔法使い	
19話	実力差	
20話	お泊まり	
21話	不穏な動き	

1話 退屈

ある日の冬の夜

「……さい……お嬢様……」

誰かが起こしているようだ。

「んく……あともう少し……」

と言い眠ろうとしたその時

バサツ!!

「さむつー！ちよつと、咲夜！」

冬の冷たさで目覚めた彼女はとても不機嫌そうだ。

いま御立腹な様子の彼女がお嬢様……レミリア・スカーレット、特別な能力のある吸血鬼の主人である。そして、お嬢様を起こしている彼女……十六夜咲夜、こちらも特別な能力がある従者だ。

「少し手荒ですいませんお嬢様。こうでもしないと起きませんので。あと、食事の準備が出来ております。」

不機嫌なお嬢様を物ともせずに淡々と話を進めていく彼女は鋼鉄の心でも持っているのだろうか

「——まあいい。それより今日のご飯は何?」

早く料理を出せという顔で彼女はそわそわしている

「トマトソースのパスタで御座います」

テーブルの上に置かれたそれはとても赤く、血にも似たような色をしている。

「あら、美味しそうじゃない。寝起きでも大盛りはいけそうね。」
そう言いながらもぐもぐ食べ終え、食後のワインを楽しみながら彼女は少し考え事をしていた。

（何不自由ない生活は良いのだけれど、毎日こうしていると飽きて来るわね。何か大きい事件とか起きないのかしら…）

何やら考えついたようで、不敵な笑みを見せた彼女は自分の部屋からそそくさと出て行つた。

彼女の向かつた場所——屋敷内にある大きな図書室である。

本を読みに来たのではなく、その管理者へ会いに来たのだ。

「おーい、パチエー!!」

図書室全体に響き渡るぐらいおつきな声を出して叫んだ。

「図書室では静かにしてつて言わなかつた？毎回大きな声を出されると心臓に悪いのよ…」

奥からブツブツ言いながら出て来た彼女… レミリアの友人で大魔法使いのパチュリーノーレッジである。

「ごめんなさいね。早くあなたに会いたくてつい大声出しちやつた！」

はあ… とため息をつき、

「突然ここに来るつてことは何か用があるんでしよう？」

『「何も言わなくともわかるとは流石ねパチエ。心でも読めるんじゃないの（笑）。まあそれはそれで置いといて、さつそく本題に移るわ。

退屈な日々から抜け出せるような魔法つてない？』

何を言うかと思えば突拍子も無い事を言い出したのである。これには流石の大魔法使いでも頭を抱えている。

「あのね、レミイ。魔法つて言うのはそんなに便利なものじゃないの。魔法つて言うのは――――――

魔法について熱く語る彼女はまさに喘息をも吹き飛ばす勢いだつた。

「ごめんごめん。悪かつたよ。パチエ。じゃあ、別の世界へ移動は出来るの？例えばパラレルワールドみたいな…」

「ええ、行けるわ」

今度は即答だつた。

「行けるの！？聞いた私が驚いたわ。それがわかつたら早速準備よ！時間は待つてくれないわ！」

「だいたい3日は掛かるわね。その間はゆっくりしてるといいわ。」

「ありがとう。パチエ！その間は計画でも建てようかしら…。咲夜、3日後に備えて準備して起きなさい」

彼女がそう言うと、何処からともなく現れ

「承知致しました。他の召使いに屋敷を任せよう伝えて起きます。」

そう言うとまたスッとその場から居なくなつた。

2話 驚きとわくわく

「少し揺れるわよ。準備はいいかしら？」

パチュリーがそう言うと魔法陣が光り輝いて辺りを包み込んだ。

時は少し前に遡る。

「さて、誰を連れて行こうかしら……。咲夜は決まっているし、あとは……」

「はい！はいはい！行きたいですお嬢様!!?ぜひ私を！」

「あなたは門番の仕事があるでしょう。主のいない時に守らなくてどうするのよ。」

「うう…すみません…」

お嬢様の正論で落ち込んでいる彼女…名前は紅 美鈴。主に門番をしている。感情豊かで少し落ち着きがないのが特徴。

「で、でもどうしても行きたいんです！いつつも門の前で立つてるだけじゃ飽きるんですよ…」

それが仕事なのだがと頭を少し抱えるレミリアであつた。

「うーん…部下の気持ちは組むのも上の立場つてものよねえ…。いいわ、任せておきなさい。」

「流石お嬢様！感謝感激であります！」

わくわくして目をキラキラさせている美鈴の顔を見ていると、こつちまで嬉しくなつてしまふ彼女であつた。

「フランは…まだ早いわね。あつちで行けそくならまた連れて行こうかしら。」

彼女の中での人選は決まつたようだ。

「…………つてことでパチエ！決まつたわ。私と咲夜と美鈴の3人で行く事にしたの。」

「あら、私は行くわよ？と言つより、この屋敷ごと行くのよ。」

この言葉を聞いて驚きを隠せない彼女であつた。

「私の考えた時間は一体…。それよりも、めずらしいわね。あなたが本以外で外に出る事なんてあつたかしら？」

「向こうで研究する事が山ほどあるのよ。この世界の知識とは別

の知識を発見できるかもしれないからね。それに――

「ああ、またか…と顔をしかめるレミリア

「わかつたわかつた。パチエの確かに對する熱い想いは伝わったよ。もういつでも行けるの?」

「ええ、後は魔法陣を描くだけで完成するわよ。小悪魔、この本戻しておいて。」

後ろから人影が出てきた

「了解です!あ、お嬢様!いらしたんですか。コーヒーをお持ちしますのでそこの椅子に腰をかけといてくださいね。」

彼女はパチュリーの使い魔…名前は無いので小悪魔と呼ばれている。基本的には図書室の司書をしていたり、主のお世話をしている。

「あら、ありがとう。貴方は異世界についてどう思うの?」

「どう…と申されましても…よく分からないです。ただ、向こうにも悪魔や魔法使いなどがいるのか気になりますね。」

「いると面白そうよね。いえ、きつといるわ!うん、いる!そう運命が囁いているもの。」

小悪魔との話が終わる頃、どうやらパチュリーは魔法陣を描き終えたようだ。

「そいやパチエ、向こうの世界にはもう1人の私がいるんじゃないの?」

「いい質問ね、レミイ。だけどそれはないわ。御都合主義つて魔法があるのよ。」

「ごつごうしゆぎ…?なにそれ」

少し不安だが、パチュリーに任せておけば大丈夫と思ひながら魔法陣の中心に入つていつた。

3話 新世界への一步

「——レミイ、着いたわよ。」

「え、もう着いたの？何かこう、ワープトンネルみたいなのはくぐつて無かつたんだけど…」

「魔法にはそんなもの必要ないのよ。ただ、魔力が多く必要なのが難点だけど私には関係ないわ。少し外を見て来てごらん。」

魔法陣に入つてから一瞬の出来事で本当に異世界に来たのか戸惑うレミリアだつたが、その疑問も直ぐに消え去つていた。

「すごい！すごいわ！近くに大きな山があるし、湖もあるのね！自然豊かでとても住みやすい環境だわ！」

感激しているのもつかの間、何者かが突然レミリアの前に現れた。

「あら、いつの間に蚊が入り込んだのかしら。招待した覚えは無いのだけれど。」

「面白い能力ね。当分は居させてもらうつもりよ。それが何か不服でも？」

なにも無いところから出た彼女に驚きもせずにじっと睨みつけた。「あらあら、そんな怖い顔しないで。幻想郷は全てを受け入れるわ。勿論あなた達もね。」

「げんそうきょう？ そう言う国の名前なのねここは。貴方は気に入らないけどこの国は気に入つたわ。」

「そう、それはどうも。私の名前は八雲 紫よ。この幻想郷の管理者つてところね。貴方は？」

「私は偉大なる吸血鬼、レミリア・スカーレットよ。この館、紅魔館の主だ。」

いきなり出て来た金髪ロングの美しい女性…八雲 紫という。この女性も特別な能力を持つており、何を考えているかわからない危険人物である。

「見た目と違つてしまふとしているのね。私は冬眠に入るけ

ど、あまり異変は起こさないでね。」

「待て、聞きたいことがたくさ――――」
スツ　　と彼女は消えてしまった。

「咲夜、この館の周辺を見て来なさい。美鈴は仕事に戻つて。パチュリ―は屋敷に結界をはつて来てちょうだい。」

「承知致しました。」

「異世界にせつかく来たのに仕事かあ……。いた！すいません！了解です。」

「警戒しそぎじゃないかしら。まあいいわ。」

各々が動き出し、レミリアはあの女に対して何か対策を取らねばならないと感じ始めていた。

「幻想郷つて言うらしいですよ。なんだか面白そうな感じがしてきましたね咲夜さん！」

「これは遊びじゃないのよ。しつかり門の仕事してね。」

「臨時手当はあるんですか……？」

「ちやんとあるわ。だけど、何が起ころるか分からなから気をつけるようにね。」

「やつたー！ありがとうございます！あ、ここでは前の世界のお金つて使えるんですかね……？」

「さあ？私は使えなくとも構わないわ。」

「そ、そんなあ……」

2人は話し合いをしながら外へ出て行つた。

一方、パチュリ―の様子は……

「ただでさえ病人なのに私の使い方が荒いのよ。まったく……。ただ、レミイの頼みなら断れないのよね。小悪魔、ちょっと手伝ってくれるかしら？」

「わかりました。ですが、あまり無理はなさらないようにしてくれださい。かなり魔力を消耗していらっしゃる様子で……。」

「これくらいなんともないわ。さ、無駄口叩いていいで始めるわよ。」

これから始まる運命にレミリア達はどう動くのだろうか……

4話 未知との遭遇

八雲 紫との出会いから2日後の夜の出来事

「あの女について何かわかつたのかしら、咲夜。」

「いえ、この辺りには彼女の足取りを掴めそうなものは特になさそうです。話は変わりますが、近くの森で子どもがうろついているようです。」

「子ども…ねえ。こんな夜にうろついていて危ないとは思わないのかしら。ちょっと様子を見てきなさい。」

「承知致しました。」

幻想郷には常識がないのか、それともただの子どもでは無いのか。あまりいい顔をしてはいなかつた。

数分が立ち、咲夜は森でうろついている子どもを発見した。金髪で赤いリボンを身につけているのが特徴的だ。

「こんな夜遅くに森にいては危ないわよ。早くお家に帰りなさい。」

「ふふ。お家はないよ。ここで待つてるの。」

（捨てられたのであろうか…なんにしても1人では危ないわ…）

「もし良ければ主人の屋敷へ案内しましようか？貴方が住めるよう説得しますが…」

「ほんと!? それは嬉しいな♪ 私、ルーミアって言うの。よろしくね。」

金髪の女の子…名前はルーミアという。ただの子どもではなさそうだが…。
「十六夜 咲夜よ。そういうやさつき待つてていると言つたわね。誰を待つているの？」

それを聞いたルーミアは不気味な笑みを浮かべ

「食べてもいい人間よ。そういう貴方はこの辺には見ない顔だけど、村の人間じやないのかな？ だつたら食べてもいいよね！」

村があるという良い情報を手に入れたのは良いのだが、これから面倒くさくなるという状況に深くため息をついた。

「私をその辺の人間と同じと思うと痛い目見るわよ。」

ルーミア vs 咲夜

「人間なんてみんな同じ弱い生き物よ！これでもくらえ！」

シユパパパ

何やら弾のような物をたくさん出してきた。

（魔力とは違うわね… この弾は一体…）

そう考えながら軽く避けていると、ルーミアは感心したらしく「本当にただの人間つてわけじやなきそうね。じゃあこれならどうかな！」

そういうと、今度は大きい弾を連続で発射してきた。

「ツ!!？大きいわね。だけど、避けられないってわけじやないわ。」

さつきと同じようにかわしていく咲夜。何度もやつても無駄だと言う顔をしていたその時！

目の前が見えなくなつたのである。

（な、いきなり周りが暗くなつた！月は出ているはず… 何故なの…。）

初めての現象に戸惑いを隠せない咲夜は、油断してしまい弾の一発を受けてしまった。

「ぐつ…」

体に衝撃が走り、足の骨にヒビが入るくらいの痛みを受けた。

「今の… 当たつたのね!!？この暗闇の中で弾を避けるなんて事は出来ないでしよう？ふふふ」

ルーミアはかなり上機嫌である。もう相手に勝ち目はないと判断し、大笑いしている。

（暗闇なんて厄介な技ね。だけど、さつきの反応からは私の姿は見えないってことよね。だとすると…）

咲夜は何かを思いつき行動を開始する。

「さあ、これでさよならよ！住まわせてくれるのは嬉しかつたけど、お腹が減つちゃつたから仕方ないよね！」

次の瞬間、暗闇の中にエネルギー弾が大量に打ち込まれた!!

ドドドドーン!!!!

「さて、もうそろそろ食べ頃かな——」

どうなったのか気になるルーミアは暗闇状態を解除して周りを探していたが、そこには彼女の姿はなかつた。

「なつ、どうして！どこにいるのよ！倒れたんじゃないの！」

「……」

背後から声が聞こえてきたが、焦りと恐怖で振り向けなかつた。「貴方は暗闇の中を確認することができないはず。そこの盲点を突いたのよ。」

「で、でも貴方はダメージを受けて立てないはずじゃ……」

「それは秘密よ。これでチェックメイトね。」

必死の思いで振り返り顔に弾を打ち込もうとするも、虚しく避けられナイフを突き立てられた。

ルーミアは心を折られ、咲夜に敗北した。

「ごめんなさい……許してください……」

「別に殺す気は無いわ。私は主人に様子を見てこいと言われただけですもの。」

そういうとどこからかハンカチを取り出し、泣いているルーミアの顔を吹いた。

あと情報もね。」

「ありがとう咲夜！優しいんだね！」

「これからはメイド長と呼びなさいね。改めてよろしく。」

こうしてルーミアは館の雑用係となつた！（昇給あり）

5話　面接

2人の戦闘後から数十分後

「さあ着いたわよ。お嬢様には私が言つておくから。ここで少し待つていなさい。」

「はい！メイド長！」

真っ赤に染まつたその建物は、月明かりでとても不気味に見えた。

「おつきい建物！ここに住むのね。何で窓が無いんだろう……？まあいいや！」

ルーミアが考え事をしているうちに咲夜は帰ってきた。

「OKをもらつたわよ。まずはお嬢様に挨拶をしなければならないわね。この屋敷はとても広いから迷わないようにしつかりついてきて。」

そう、外から見ると大きいだけの屋敷なのだが、中を見るとそれをも超える広さと高さがあるのだ。

「すつごい広いのね！これって何の妖術なの？」

「妖術？違うわ。これは私の能力と魔法のおかげよ。」

「メイド長つて凄いんだね！魔法使いなんだ！」

「この魔法はお嬢様の友人の魔法よ。私はあまり得意では無いの。それより、妖術つて何かしら？」

「妖術つてのはね、魔法みたいな感じだけど少し違うんだ。魔力みたいなのがなくても使える不思議な能力だよ！私みたいな妖怪だと妖氣を変えて自分の技を身につけたりもできるのよ！それが私の暗闇を作る能力ね。」

(この世界では妖怪という種族がいるのね。この先も出会うどうから気をつけなければ……)

「良いことを聞いたわ。ありがとね。さて、話している間にお嬢様の部屋に着いたわよ。失礼のないようにね。」

コンコン

「入つて良いわよ。」

こんな事は初めてなので緊張するルーミアであったが、勇気を出してドアを開けた。

「し、しつれいします。… わつ！」

お嬢様を人間だと思い込んでいたルーミアは背中の羽を見てびっくりした。

「あら、驚かせたみたいね。私は見ての通り、吸血鬼よ。よろしくね、新人さん。この屋敷では自分の家のように思いなさい。」

「な、名前はルーミアと言います！ふつつかものですが、頑張らせていただきます！」

「あら、可愛い名前ね。元気なのは良いことよ、ルーミア。」

自分の名前を可愛いと言ってくれて顔を赤く染めた。

「とりあえず今日は休みなさい。明日から仕事を頼むわね。」

「はい！レミリアお嬢様！失礼いたしました。」

パタンツ

（ふう… 緊張したなあ… 思つたより優しくて良かつた。）

扉の外で安堵していると、目の前に咲夜が現れた。

「わっ！急に現れたからびっくりした！その技面白そうだから教えてくださいメイド長！」

「残念。貴方にはまだ秘密よ。それより貴方の部屋が出来たからいらっしゃい。」

そう言うと彼女はスタスタと歩き、ルーミアはそれに着いていつた。

「ここが私の部屋なのね！とつても広くて綺麗！」

この部屋が気に入ったのかベッドでジャンプして大騒ぎしているルーミア。

「明日は朝早いから早く寝るのよ。おやすみなさいルーミア。」

「おやすみなさいメイド長！ふう、明日からお仕事かあ。頑張るぞっ！」

そう意気込みながらベッドに潜る彼女であつた。

6話 初仕事

コンコン

ドアのノックが聞こえる。どうやら仕事の時間のようだ。

「ふあ～…。おはようござります。メイド長。」

「ぐつすり眠れたかしら？ 着替えと朝食はそこに置いてあるから、準備が出来次第玄関に来てちようだい。もし迷つたらこのボールを握ると良いわ。屋敷の中なら直ぐに私が行くから。」

そう言うとさつと姿を消した。

なんと便利な道具でしよう。これはパチュリリーに頼んで作つた物だそうだ。元々はお嬢様の為に作つたものである。

（こんな道具も作れちゃうなんて、凄い人ばっかりなんだなあ…）

ぱぱつと朝食を済ませ、着替えて玄関へ向かつた。途中何度か迷いそうになつたが、なんとか無事にたどり着く事が出来た。

「あれ、見ない娘ですね！ 新人さんかな？」

「あ、どうも！ 初めまして。ルーミアと言います！」

「ルーミアちゃんかあ！ 私は紅 美鈴つて言うの。よろしくね！ いつも門番の仕事をしているわ。」

2人は気が合つたようで楽しく話し込んでいた。

「あら、仲が良いわね2人とも。今日はルーミアの初仕事よ。美鈴、手伝つてあげなさい。」

「あ、おはようございます咲夜さん！ 仕事つて言つても、門の前で立つてるだけなんですね。」

「今日は門の仕事はいいのよ。庭の手入れをして頂戴。ついでに洗濯物も干しておいてね。」

そう言うと咲夜はいそいそと屋敷の奥へ行つてしまつた。

「さて、早速始めよつか！ 手入れのやり方とか色々教えるから、分からないことがあつたら聞いてね。」

「さつそく一つ良いですか！」

「ん、どうしたの？」

「どうしてメイド長やお嬢様みたいな服とは違うような見た目をしているの？」

そう、西洋風な服とは違い、美鈴の服は中華風の服なのだ。

「ああ、これはあれよ。お嬢様達と会う前は違う所にいてね、その時の服がこれなんだ。あとは動きやすいからかな？」

何やら色んな思い出が詰まつた服のようである。

「私も着てみたいなあ…」

「今度門番をする時に着せてあげる！それまで楽しみにしててね！」

美鈴はそう言つて庭へ向かい手入れを始めた。ルーミアも手入れを始めたが、中々上手く出来ず、少し落ち込んでいるようだつた。「初めてだから失敗ばっかりなのは当たり前だよ。気にしない気になさい！これでも食べて元気出して。」

美鈴はカバンからおにぎりを取り出した。

「もうお昼だからね、ご飯を食べないと力が出ないよ！」

「ありがとうございます美鈴さん。いたします！」

昼食を終え、美鈴の励ましの言葉で張り切つたルーミアは、無事に洗濯物を干し終える事が出来たようだ。

「今度はちゃんと出来た！やつたよ！」

「こんなに多くの洗濯物をあつという間に終わらすなんて、すごいよルーミアちゃん！」

こうしてあつという間に時間は過ぎ、疲れ切つたルーミアは屋敷に戻つた。

「2人ともお疲れ様。ルーミア、初仕事はどうだつた？」

「何とか出来ました！」

「ふふ、それは良かつたわ。私は夕食の準備をしているから先にお風呂入つてきなさい。美鈴、案内は頼んだわよ。」

「はーい！じゃあ行こつか。一緒に洗いつこしようね！」

「うん！」

この様子を見ていると何だか美鈴が姉でルーミアが妹のように

見えた。

楽しいお風呂の時間が終わり、これから夕食だと言う時にある異
変が起つた……。

7話 地下からの挑戦

美鈴達が風呂から出た頃、ちょうどレミリアは目が覚めた。

「咲夜、あの娘の様子はどうかしら？」

「しつかりと働いており、使えるかと。」

「そう、良かつたわ。さつそく新しい住人の歓迎会を始めなければならぬわね。準備は出来ているの？」

「はい、食卓に沢山の御馳走を用意しております。お嬢様は着替えをなさつてから食堂にお越しください。」

「流石にパジャマでは行かないわよ。それと――」

ドカーーンツ

下の方角から爆発音が聞こえて来た。紅魔館には地下があり、厳重に結界で守られている。

「…妹様ですね。見て来ましょうか？」

「はあ…いや、いいわ。私が行くから咲夜は食堂で待つていて。」

「承知致しました。行つてらっしゃいませお嬢様。」

（全く世話のやける子だわ、ほんとに…）

頭の中で考え事をしながら地下へ向かう途中、美鈴達に出会った。

「あら、あなた達はお風呂だったのね。湯加減はどうだったかしら？」

「良かつたです！」

「じゃなくて！今の爆発音はまた妹様ですか！」

「ええ、そうよ。私が様子を見に行くからあなた達は食堂で待つてなさい。」

「了解です。お気をつけてくださいね！さ、行くよルーミアちゃん。」

「はい！」

美鈴に手を引つ張られ、ルーミアは食堂へと進んで行つた。

「美鈴さん、さつき妹様って言つてたけど、もしかしてお嬢様の

妹つて事?」

「そうよ。名前は フランドール・スカーレット と言うの。普段は優しいのだけれど、たまに好戦的になつて危ないのよ。普段は地下にはいるからあまり近づかないようにな。」

「この屋敷つてふくざつな事情があるんだね。」

「姉妹は姉妹同士じやないとわからぬことがあるんだね。私達は基本的に見守るだけよ。」

一方、レミリアは地下へとたどり着いた。周りは破壊された扉の破片が飛び散っている。

「また派手にやらかしてくれるわね。直すのもタダじやないと言うのに…」

深くため息をつくレミリア。その背後から人影が現れた。

「あら、今日の相手はお姉様なのね!これはまた楽しそうだわ♪」「時間がないの、全力で行くわよ。」

フラン vs レミリア

先手はフランがとつていた。左右から放たれる弾幕はかなりの数である。

「どう?お姉様には避けられるかしら。」

戦いを楽しんでいる彼女は不気味な笑みを浮かべ、さらに大きいやつを打ち込んだ。

「ただ弾を飛ばしているだけじゃ当たらないわよ。しつかりと狙いなさい。」

荒れ狂う弾の中を簡単に抜けて行く彼女はとても優雅で美しく、フランでさえも見とれていた。

「へえ… やるじやない。ならこれはどう?」

彼女は弾を撃つのを一旦止め、自身に力を込め始めた。なんと!4人に増えたのである。

「これは分身なんかじやないわ。全部ホンモノよ。お姉様には私達を倒せるのかしら。」

4人一斉に打ち込まれた弾幕は今までとは比べものにならないくらいの破壊力だった。

「私に怪我をさせるなんて、すごいじゃないフラン。いつの間にこんな事出来るようになつたのかしら。ほんとはもつと遊んでいたいけれど、これで終わりよ。」

レミリアが右手に力を込め始め、緋色の槍がでてきた。
「これでも食らいなさい！ グングニル!!!」

その槍は禍々しく、当たれば即死レベルの魔力が帶びていた。猛スピードで投げられた槍は1人目のフランへ向かつて行つた。

「お姉様の力つてこんな物なのね。期待してそんしちやつたわ。」
彼女はそう言い、ひらりと槍を避けてしまつたのである！

「私は最初から全力で行くと言つたはずよ……？」

レミリアが笑みを浮かべて呟くと、4人いたフランが1人に減つてしまつっていた。

「どうして！ 槍は避けたはずよ！ 当たるはずないのに……」

「そう、ただの槍ならそれで終わりよ。でもね、私のは特別なの。何処へ逃げても必ず見つけ貫くのよ。必ずね。」

はつと振り返つた頃にはもう遅かつたようで、目の前に槍が迫つていた。

「出し抜かれたつて訳ね。参つたわお姉様。」

槍がフランに当たる瞬間、シユウウウ……と音を立てながら槍は消えていった。

「これ以上屋敷を壊すのは面倒だからね。大人しく地下へ戻りなさい。またいつでも勝負してあげるから。」

「次は絶対お姉様には負けないもん！ すつごい技見せてやるんだから！」

こうして小さな異変は幕を閉じた。

8話 パーティー

レミリアは地下での戦闘後、一旦自室へ戻った。

「そういうやまだ着替えて無かつたわね。せつかくのパーティーなんだもの、派手に行かなきや。」

咲夜の持ってきた赤いドレスを身に付け、わくわくしながら食堂へ向かつた。

「今日のご飯はなんだろうなあ。ルーミアちゃんはなんだと思う？」

「うーん……美味しそうな匂いがいっぱいあってわかんないや……」

「今日の料理は全部咲夜さんが作つたんだよ。咲夜さん、今日は何を作つたんですか？」

「それはお嬢様が来てからのお楽しみよ。もう直ぐ着くらしいからそれまでの辛抱ね。」

3人は楽しく会話を弾ませていた。

「遅くなつてごめんなさいね。早速だけど、これから私達の住人ルーミアの歓迎会を始めるわ！ 咲夜、アレを。」

彼女の一言で食堂の灯りは全部消え、真っ暗になつた。そして直ぐに明るくなり、小さな破裂音がなつた。

『『パンツッ!! 紅魔館へようこそ!』』

次の瞬間、食卓にずらりと豪華な夕食が現れた。これも咲夜の能力である。

「どう？びっくりしたかしら。中々面白いとは思つたのだけれど。」

「びっくりなんてものじやないですよ！感動しました……あります」といいますお嬢様！」

「お礼なら皆に言うと良いわ。ここにはいないけど、パチュリーリ達も手伝つているからね。さて、冷めないうちに食べましょか。」

レミリア達はわいわいと食事を楽しんだ。その後ルーミアはレ

ミリア達と別れ、パチュリー達にお礼を言いに図書室へ向かった。

コンコン

「入つて良いわよ。」

「失礼します。先日、こここの住人になりました！ルーミアと言います。今日はパーティーのお礼を言いに来ました。」

「お礼なら別に良いわ。それよりも貴方、妖怪なんでしょう？この目で見るのは初めてだわ。こっちにおいでなさい。」

領いて奥に入つていくルーミア。彼女の前に立つと様々な場所を触り始めた

「基本的には体の構造は同じみたいね。他の種類は違つたりするのかしら。」

「はい、スピードが早い天狗や力持ちの鬼などがいます。」

「天狗に鬼ね、なんだか面白そうじゃない。これでこそ研究のしがいがあるつてもんよ。他にはどんな妖怪がいるの――」

30分くらい質問ぜめにあつたルーミアはヘトヘトになつて解放された。

「ありがとうございます。今日は遅いからまたお願ひするわね。」

「は、はい。おやすみなさい。」

（はあ、疲れたあ・・・。あんなに質問されるなんて初めてだよ・・・。よっぽど研究好きなんだなあ。）

そう思いながら自室に入つていった。

「さて、明日も早いからもう寝ようかな。おやすみなさい。」

ルーミアが寝静まつた頃、レミリアは自室で咲夜と話し込んでいた。

「咲夜、この世界ではどんな常識も通じないと想いなさい。油断は禁物よ。それに、これから何か起こる様な気がするの

⋮

「肝に命じておきます。この世界の情報をできる限り集めて参ります。」

「ありがとう。とりあえずこの話はお終いよ。また何かあつたら報告しなさい。」

「承知致しました。」

これから始まつていく異変に彼女達はどうするのであろうか…

9話　　いざ、人里へ

パーティーから数日が経ち、ルーミアにある程度仕事を任せられるようになった。

「それじゃ私は出かけるけど、仕事の方は頼むわね。夕方までには戻るから。何かあつたら美鈴を頼ると良いわ。」

「わかりました。行つてらつしやいませメイド長！」

咲夜の出かける場所は人里である。ルーミアに大体の場所を聞いていたので迷うことはなかつた。

「思つたより遠いのね。人里つて言うから結構大きい集落だと思ひ込んでいたわ。」

しばらく村をうろついている彼女だが、ある事に気がついた。
(この村の人たちは和服を着ているのね。そういう風習でもあるのかしら。そんな事より今は情報が先ね。)

「いきなりでごめんなさい。聞きたいことがあるのだけれど、八雲　紫について何か知つているかしら？」

その場にいた村の男に話しかけた。

「八雲と言えばあの大賢者様じやないか！いつもどこにいるかはわからないけど、とつても美人なんだ。嬢ちゃんはその賢者様に何か用かい？」

「いえ、少し知つておきたくてね。ありがとう、助かつたわ。」

「可愛い子の頼みなら何だつて聞くのが男つてもんさ！そんなに賢者様の事が知りたいなら、この先にある鈴奈庵つていう本屋か稗田様の家に行くといいぜ。俺はこれから仕事なんでまたどこかでな！」

そう言うと男は去つて行つた。

「とりあえず本屋に行きましようか。ついでに他の情報も手に入るかもしねないわ。」

歩く事数分、本屋らしき建物が見えた。中に入ると結構な数の本が積み上げられていた。

「ごめんね！今はお掃除中なのよ。また後でいらしてね。」

パタパタとハタキを振りながら出て着たツインテールの女の子はとても忙しいようだつた。

本屋を後にした咲夜は次の情報を探しに稗田の家を探した。

(稗田様とおっしゃつていたわね。相当な貴族という事は間違いないから見つけるのは容易ね。)

しばらく探していると一軒の大きな屋敷があり、門の前に変わった服装をした白髪の女の子が1人いた。

「失礼、少しお訪ねしたいのですが、ここが稗田家であつているのかしら?」

「ああ、そうだ。稗田家に何か用か?」

「ええ、聞きたい事があるのよ。お会いする事はできるのかしら?」

「許可がでるまでここで待つていてくれ。少し時間がかかる。」「わかつたわ。そういう貴方は門番つて感じじやなさそうね。一体何者なのかしら。」

「ただの雇われ門番だよ。私のことはいいんだ。それより許可が出たから入つていいよ。くれぐれも不審な行動はしないようにね。」

門番に場所を伝えられ、咲夜は奥へと進んでいった。紅魔館程度はないが、かなり広い屋敷である。

「ようこそおいでくださいました。私は稗田家9代目当主の稗田阿求と申します。貴方は?」

「十六夜 咲夜よ。貴方、当主なのに随分と若いのね。」

稗田 阿求 彼女は10代ですでに当主である。彼女にもまた特別な能力があり、とてもおしとやかな性格である。

「色々ありますからね。そういう私に聞きたい事があるのですよね?何なりとお聞きください。」

「では早速。幻想郷の管理者、八雲 紫について知っている事を全部教えてもらえるかしら?」

「八雲 紫ですか? また難しい事を聞きますね。彼女は幻想郷を作つた大妖怪であり、賢者とも呼ばれています。能力についてですが、境界を操る程度の能力を持つと言われています。私に分かる

ことはこれくらいのことですかね。」

「境界…ね。ありがとう。良い情報を聞けたわ。お礼はさせてもらわね。」

そういうと、どこからともなくクッキーを取り出した。

「凄い魔法ですね！少しひっくりしちゃいました。」

「これはトリックよ。またお会いしましょう。」

咲夜は音も立てずにその場から消えた。

10話 村の本屋さん

稗田家で情報を入手した後、咲夜はベンチに腰をかけ昼食を取ることにした。ルーミアが作ったお手製の弁当である。

(よく出来てるじゃない。見た目も味も最高よ、特に卵焼きがいが甘さだわ。帰つたらしっかりと褒めてあげないとね。)

時刻は午後1時を過ぎ、咲夜はさつき中に入らなかつた本屋へと向かつた。

「掃除は終わつたのかしら本屋さん。」

「はい。終わりました！こちら、鈴奈庵の店主、本居小鈴と言います。いや、大掃除なんてそう滅多にやらないもんで、大変でしたね。そういうや何か本をお探しで？」

本居小鈴、彼女は若くして店主である。阿求とは友人関係で、休みの日には2人で遊ぶこともしばしば。少しおつちよこちよい。

「ええ、妖怪に関する本を見たいのだけれど。あるかしら？」

「ちよつと待つてくださいね。……つと、これとこれ。あ、それにこれも！妖怪を比較的に分かりやすく書いたものと、より詳しく書いたもの。それと、対処法の本をお持ちしました！」

彼女はそれをパラパラとめくつた後、何かを見つけたようだつた。

「全部貰つて行くわ。代金は変わりにこれを受け取つてちようだい。」

会計場所にとても高価そうな金の塊を置いた。

「……これは本物？初めて見た……でも、こんな高価そうなもの受け取れませんよ！お金は持つていないんですか？」

「ええ、こちらのお金は持つていないわ。見た所紙幣のようだからね。」

「そういう事ならいい場所がありますよ！ここから少し遠いんだけど、村のはずれにある道を真っ直ぐ進めば香霖堂と言う店に着きます。そこでならその金塊もお金に変えてくれますよ。」

「香霖堂はこのまま真っ直ぐ行くといいのね？少し待つていて。」

「えつ——」

次の瞬間 目の前にいた客人は消えてしまい、小鈴は何が起こつたのかわからなかつた。束の間、彼女は再び現れた。

「待たせてしまつてごめんなさいね。代金はいくらなの？」

「えつ、あ、はい！ 2500円になります。いやうびつくりしましたよ。いきなり消えちゃうんだもの。」

「2500円ね、はい。さつきのトリックは頑張れば貴方にも出来るようになるかもね。また来るわ。」

「とりつく？新しい魔法なのかな…… またのお越しをお待ちしておりますー！」

咲夜は鈴奈庵を後にし、時計を見た。もうすぐ夕暮れである。

「今日の情報収集はこれでひとまず終わりね。お嬢様がそろそろ起きる時間だから早く戻らないと……」

村を一通り見終えた後、急いで屋敷へと帰つた。

「あ、お帰りなさい 咲夜さん！ 村はどうでした？」

「結構栄えているわね。食材や衣類なども豊富で困つた事はあまりなさそうだけれど。それと美鈴、貴方はルーミアを連れて食事の準備をしなさい。私はお嬢様と後から行くわ。」

そういうと彼女は姿を消した。

「さて、ルーミアちゃんを迎えて行きますか！ 確か図書室だよね。」

美鈴はスキップしながら図書室へ向かつた。

11話 幻想郷での日常

コンコン

「失礼します。ルーミアちゃんを迎えてきました！」

「あら、あの娘は今さつき紅茶を入れに行つたわ。もうすぐ帰つて来るからここで待つといいわ。」

「はい、そうさせてもらいます。そういうや、ルーミアちゃんの仕事ぶりはどうです？」

「ほんとうに良く働いてくれているわ。小悪魔がいない時はまたあの娘に頼もうかしら。」

そう、小悪魔は週5のパートである。悪魔にだつて休みはあるんです。

2人が話していると、図書室の入り口からルーミアが入つて來た。

「パチュリ様、紅茶をお持ちしました！ここに置いておきますね。あ！美鈴さん。図書室に用ですか？」

「用があるのは貴方よ。咲夜さんから2人で食事の準備をして来なさいつて頼まれたの。つてことでパチュリ様、ルーミアちゃんをお借りしていきますね。」

「ええ、分かつたわ。紅茶ありがとね、ルーミア。今度は魔法の実験に付き合つてもらうわね。」

「わかりました！では失礼いたしました。」

図書室のドアを閉め、2人は食堂へ向かつた。

同時刻、咲夜はレミリアと何やら話し込んでいた。

「お嬢様、妖怪に関する情報は一通り集めて参りました。これから如何なさいましようか。」

「そうね、少しその本を見せてみなさい。ふむふむ…。この妖精という生き物はなんだか面白そうね。屋敷に何匹か招待しておきなさい。この本はしばらく読ませてもらうわ。」

そう言うとレミリアは妖怪について興味を持つたのか、食い入るように妖怪図鑑を見ていた。

「お食事はどうなさいますか？よろしければこちらへお持ちしますが。」

「そうしてくれると助かるわ。しばらくは動けないわね。それと紅茶も入れてきてちょうだい。」

「承知致しました。」

咲夜は夕食と紅茶をレミリアの部屋に運び、美鈴達のいる食堂へと向かつた。2人は楽しく話していたようだ。

「あら、待たせたかしら。お嬢様は忙しくてこれないそうよ。」

「あ、咲夜さん。ちょうど今来た所ですよ。なるほど、わかりました！さつそくご飯を食べましょう！」

食卓には色鮮やかな料理が並んでいた。

「「頂きます」」

3人は食事をすませ、お風呂に入つた後自分の部屋へと戻つていった。

一方レミリアは妖怪図鑑を次の日の午後まで見続け、目にクマが出来ていた。初めて見る生物に好奇心が湧き、夢中になつて寝る事を忘れていたのである。

(この幻想郷にはいろんな妖怪がいるのね。特に鬼なんて良さそうじゃない。吸血鬼の仲間なのかしら。それより、そろそろ寝ないとまずいわね。)

レミリアは、ふらふらの足でベッドに入った。今までの疲労もあらせいか直ぐに眠ることができた。

12話 文々。新聞

幻想郷にレミリア達が来訪し、数週間がたつたある日の朝 屋敷に興味を持った少女が空から飛んで来た。

（妖怪達が住む森の近くにあんなに目立つ屋敷があるなんて見えたことがないわ。ネタの匂いがするわね。）

彼女は門の前にいる女性に声をかけた。

「すいませ〜ん。私、新聞記者の射命丸と申します。ここの中人は居ますか？ぜひ取材させて頂きたいのですが。」

鳥のような翼を持つ彼女、名前を射命丸 文 と言う。妖怪の山に住み、大天狗から妖怪の山護衛の使命を受けている。

自分が興味を持った物はたとえ危険でも構いはしない性格。清く正しく をモットーとしており、任務が終わつた後幻想郷の隅々までネタを探し回つている。

「お嬢様はただいまご就寝中でして……。夕暮れ時になると起きてくると思いますので、その時にまたいらして頂ければよろしいかと。貴方は見たところ人間ではないみたいですが、妖怪さんですか？」

「では、明日の夕方にお伺いしますね。私は鳥天狗という種族です。特徴的なのは、このように翼を持っており自由に空を飛ぶことができます。そういう貴方も見たところ人間つてわけじやなさそうですね。妖気みたいなものを感じますもの。」

「まあ私を含めてこの屋敷に住んでいるほとんどは人間ではないですからね。そういうえば射命丸さんは新聞屋でしたね。少し見せてもらつてもよろしいですか？」

「ええ、ぜひ！購読もして頂けると助かります。」

文は彼女に今日の新聞を手渡した。文が作る新聞の内容はほとんどがゴシップ系の記事である。

「ふむふむ……。暇つぶしにはちよいどいいですね。試しに1ヶ月分購読させてもらいます。」

「あやややや、ありがとうございます！これからも文々。新聞を

よろしくお願ひしますね～。」

そう言つて彼女は飛び去つていつた。何処かにネタが無いか探しに行つたのであろう。

「この世界にも新聞つてあるんですねえ。さて、仕事仕事！」

美鈴は新聞を折り畳み、門番の仕事に戻つた。その後、夕暮れまで居眠りをしていて咲夜に見つかり、怒られてしまつた。

「門番をしていると眠くなっちゃうのは仕方ない事なんです咲夜さん～。お願ひだから給料だけは減らさないでください…。あ！そ～言えば、新聞屋さんがお嬢様に取材をさせて欲しいと来てましたよ。明日の夕方に来るらしいですが…。」

「はいはい、見なかつことにしてあげるわ。次からはしないようにな。取材、ね。許可が出るか聞いて来るわ。」

レミリアは取材の件についてあつさりOKした。

「私を取材したいだなんて流石ね、いい目をしてるわ。この際だから、妖怪達に宣戦布告をするのも面白そうね。」

「それはいけませんお嬢様。お嬢様が危ない目にあうと思うと心配で…。」

「冗談よ。私はそんな簡単に潰れるほどやわじやないわ。ちよつと遊ぶだけよ。」

クスクスと笑つてゐるが、彼女の目はやる気に満ち溢れていた。そう、レミリアは刺激を欲しがつてゐるのだ。退屈な日常から逃れるためにここへ来たのだから。

咲夜は美鈴の元へ行き、結果を報告した。

「OKだそ～よ。明日、私は手が離せない用があるの。美鈴、貴方が新聞屋をお嬢様の元まで案内しなさい。」

「了解です！いや～取材ですか！これはまた新聞を見るのが樂しみですね！」

13話 訪問取材

次の日の夕方、文は紅魔館を訪れた。

「先日はどうもです。あ、取材の件なんですが、大丈夫ですかね？」

「はい！許可が降りましたので屋敷を案内させて頂きますね。」

そう言うと美鈴は門を開け、彼女を屋敷の中へ案内した。

「結構広いですね。それに妖精がちらほらいるみたいですが、何をしているんです？」

「ああ、それは咲夜さん……メイド長が雑用係に雇つて来たんです。ここ最近忙しいらしく、人手不足ですね。」

「なるほど、色々と大変なんですねえ。」

文は彼女に数々の質問をし、ネタになるものを探していた。

「そろそろお嬢様の部屋に着きます。新聞楽しみにしてますね。」

そう言うと美鈴は門番の仕事へ戻つて行つた。

コンコン

「入つていいわよ。」

「失礼します。今回取材をさせて頂くことになった、射命丸と申します。」

「私は高貴なる吸血鬼 レミリア・スカーレットよ。よろしくね、新聞屋さん。」

（なるほど、この館の主が吸血鬼だから夕暮れ時に来いと言つたのね。）

「いや、威厳があつてまさに当主つて感じですねえ。早速の質問ですが、いつ頃からこの幻想郷に来たんですか？」

「そうね、大体1ヶ月前よ。前の世界ではあまり面白い事がなくてね。」

「1ヶ月前、と…。レミリアさんは幻想郷についてどう思います？」

「とても不思議な場所だと思うわ。今までに見た事がない生物が

沢山いるもの。一度鬼というものに会つて見たいわね。」

「鬼……ですか。そう言えばレミリアさんは吸血鬼でしたね。同じ鬼同士気が合うといいですが。」

鬼という言葉に反応する文。過去に何かあつたのだろうか。

「まだまだ質問したいことが沢山あるんですが、次で最後にさせてもらいますね。ここでの目的は一体なんですかね？私が1番聞きたいことはこれです。」

「面白い事を聞くのね。良いわ、答えてあげる。私がここに来た目的は——」

思わずゴクリと唾をのむ文。

「ただの暇つぶしよ。ここには刺激が沢山あると思つたからよ。いつそ妖怪達を従えるのも良いわね。」

（暇つぶしかーい！）

思わず心の中で突つ込んでしまつた。ただ、妖怪を従えるという言葉に相当な自信があるのだろうということはわかつた。

「この世界では沢山の強者がいますから、中々難しいんじやないでしようかね。取材を受けていただきありがとうございました。明日の新聞をお楽しみにしておいてくださいね！」

そういうと彼女はレミリアの部屋を飛び出し、猛スピードで帰つて行つた。

「ドアぐらい閉めていきなさいよね、まつたく……」

ため息をつきながらも明日の新聞がとても気になつてゐるレミリアだつた。

14話 氷の妖精

「号外、ごうがくい!!」

昨日の取材をまとめた新聞を、彼女は大声を出しながら幻想郷中にばら撒いていく。その後、彼女はネタが無いか探し回つていった。

「へえ、吸血鬼の館だつてさ。なあ靈夢、面白そうだから行つてみようぜ。」

「いやよ面倒くさい。行くならあんた1人で行きなさいよ。それに私は境内の掃除で忙しいの。暇なら手伝いなさいよ魔理沙。」

新聞の内容に興味を持った彼女、名前を 霧雨 魔理沙と言う。黒い帽子に箒を持っており、まさに魔法使いだというような格好をしている。（魔法使いです。）

神社の境内を掃除している彼女、名前を 博麗 灵夢と言う。巫女の割には奇抜な格好をしており、とても強い。

「げえっ、掃除なんてやつてたら病気になつちまうぜ。仕方ない、私1人で行つてくるか。」

そう言うと彼女は箒にまたがり、神社を離れた。

(この記事によると相当な大きさがあるらしいな。何か面白い物でもあつたら借りていこうか…)

紅魔館までゆつたりと飛んでいると、突然何者かが現れた。

「わっ！ いきなり出て来てびっくりしちゃつたじやない！ なんだ、ただの妖精か。」

妖精は悪戯が成功したようで喜んで帰つていった。魔理沙は箒から落ちそうな体制を元に戻し、またゆつくりと進んでいった。

(今度はなんだ？ 湖の周りに霧がかかっているな…。少し慎重に行くか。)

辺りを見回しながらゆつくりと進んで行くと、霧の奥から氷の塊が飛んで来た。

「あつぶねー… あんなの当たつたらひとたまりもないぜ。そこにあるのは誰だ！」

「いまのをよくよけたわね。あたいはさいきょーのようせい、チ

ルノよ！」

氷を使う彼女 チルノと言う。妖精の中ではとても強く、最強であるといつても過言ではない。知能は普通の妖精並みなのであまり賢くはない。

「最強の妖精か、面白い。この魔理沙様に不意打ちをした事を後悔させてやるぜ！……つと、その前に聞きたいことがあるんだが、スペルカードルールって知ってるか？」

「たしか、けつとうをするときにつかうあそびよね。あれであそぶのは2回目よ！」

「なら話は早いな。それで決着をきめる。手加減はしないぜ！」
「けがしてもあたいはしらないからね！」

チルノ ▼ S 魔理沙

霧があつてあまり周りが見えず、とりあえず魔理沙は相手の方を伺つた。

『そつちからこないのならこつちからいくわ！これでもくらえ！氷符「アイシクルフオール」!!!』

沢山の氷の弾幕が魔理沙を襲う！…………はずだつたのだが、チルノの正面に居たため全く当たらなかつた。

『どんなすごい技かと思つたらそんなもんか。妖精相手には勿体無いが、さつさと終わりにさせてもらうよ！魔符「スターダストレヴァアリエ」!!!』

なんと、魔理沙自身が弾幕となり相手に突っ込んでいった。それはまるで流星のように早いスピードで、周りに星の弾幕が出ていた。

「そんなのつてありなのお！？ちょ、ま、はや——」

ピチューン

まさか相手が弾幕になるなんて思いもしなかつたチルノは本気を出すことができずにあつさりと負けてしまつた。

「さつきのはちよつとゆだんしちやつただけだもん。次はまけないからな！」

「私は今忙しいからまた今度遊んでやるよ。じゃあな～。」

そう言うと魔理沙は紅魔館へと向かつた。

15話　いざ、館へ！

湖から少し離れた場所に、魔理沙は館らしきものを発見した。
(これが噂の紅魔館つてやつか。なんだか所々壊れてとても人が住んでいるようには見えないんだけど……。とりあえず入つてみるか。)

魔理沙はドアを開けようと手を伸ばしたその時！

キイイ・：

なんとも気味が悪い音がなり、ドアが自然と開いたのである。
「うわっ！び、びっくりさせないでよ……。誰かいるのか？」

問い合わせには誰も反応せず、シーンとしていた。それにしても不気味である。

(とりあえず探索してみるか。そのうち誰か出てくるだろう。)

魔理沙が洋館の中に入ると突然ドアが閉まつた。彼女は急いで開けようとするも何故か聞く気配がなかつた。魔法もいくつか試したが、傷一つ付かなかつた。

「どうなつてんだよ一体……。ここは少し変な感じがするぜ……。
とにかく別の出口を探さないと。」

魔理沙は屋敷内を探索していると、近くの部屋から音が聞こえてきた。

(な、なんだ!? 今度は急に音が鳴り出したぞ……。そこに誰かいるのかな……。)

恐る恐る部屋を覗いてみると、人は見当たらず、ヴァイオリンの音だけが部屋中に響き渡つていた。

「う、うわああああ！」

魔理沙は恐ろしくなり、必死に出口を探して走り回つていた。だが、彼女を追うようにヴァイオリンの音は近づいてくる。

「一体全体なんなのよお!! 私が何か悪いことでもしたの?
勝手に屋敷に入つたことは謝るから許してよ……!!!」

涙ぐみながら必死に謝つていると、突然ヴァイオリンの音が止ん

だ。

「止まつた…？もしかして助かつたのか…？良かつ——」

魔理沙がホツとして後ろを振り向いた時、目の前にヴァイオリンを持った女の子がいた。魔理沙は驚きを通り越し、気絶してしまった。

それから数時間後、彼女は目を覚ました。

「…っ!? 助かつたのか。それにしてもここは一体どこなんだ…？」

「私の部屋よ。人間つてほんと面白い反応をするわね。」

「で、でたあああ!!!」

「まるで幽霊を見たと言わんばかりの反応ね。あながち間違つてはいなきけど。私達はここで暮らしているの。」

「ほんと心臓に悪い種族だぜ…。達つてことはまだいるのか?」

「ええ、三姉妹なの。私が長女のルナサ・プリズムリバー。妹達が、メルランとリリカよ。あの2人はライブで今いなきけど。」

「プリズムリバー三姉妹…」 彼女達は騒霊であり、演奏するのが大得意。実力もかなりのものらしい。

「私は魔法使いの霧雨 魔理沙だ。気になることがあるんだが、ここは紅魔館で合っているのか?」

「紅魔館? 残念ながらここはただの廃洋館よ。せっかく來たんだし、私の演奏を聴いていつてよ。と言つても聞くまで返さないけどね。」

「出られないなら仕方ない。聴いていつてやるぜ。その代わり上手く演奏してくれよ?」

その後、彼女の素晴らしい演奏を聴いた魔理沙はなぜか暗い気持ちになつたのである。

「ああ、ごめん! つい鬱の音を出しちやつた。しばらくすれば戻るから。」

ルナサは手厚く魔理沙を介抱した。

16話 スペルカードルール

「もう大丈夫そうね。この部屋を出て右に出ると入り口に着くわ。」

「演奏 자체は素晴らしいんだけどな。時間がある時は聴きに行つてやるよ！じゃあな！」

そう言つて魔理沙は廃洋館を出た。辺りは静まり返り、真つ暗である。

（もう夜になつてゐるのか…。今日は諦めてまた明日探すとするか。）

彼女は魔法で自分の家まで瞬間移動をした。この魔法は移動先に魔法陣がある所ならどこにでもいける便利な魔法だ。

同時刻、紅魔館内でちよつとした出来事があつた。八雲 紫がレミリアの部屋に現れたのである。

「何の用だ。お前に構つてゐる暇はないんだが。」

「そんな野暮な事言わないでよ。少し伝えたいことがあつてね。少しの時間でいいのよ。」

「まあいいだろう。用件はなんだ？」

「この世界での揉め事や面倒ごとを決める手段を考えたのよ。單なる殺し合いじゃ面白くないでしょ？だから、遊びで解決するつてのはどうかしら？」

「そう、これが後のスペルカードルールである!!

「遊び…か。もちろん私が納得出来るようなものなんでしょうね。もしそうじゃなかつたら…。」

「そこは安心しなさい。貴方はこの遊びを気にいることは間違いないわ。それに、妹さんと遊ぶ時にも使えるわよ？」

（一体いつフランのことを…。悔れないわね。）

フランドールの部屋はパチュリーの結界魔法で包み込んでいるはずなのだが、紫にとつてはそんなものは関係ないらしい。

「その遊びの名前は弾幕ごつこと名付けたわ。ルールは——

！」

「なるほど、確かにいい案ね。特に美しさを表現するつていうところが気に入ったわ。」

「では、この話はOKということでいいわね。」

話が終わると彼女は去つていった。

「咲夜、早速スペルカードを作るわよ。強くて美しいのを沢山ね

！」

「承知致しました。ですが、あの胡散臭い物の言葉を信用して良いのですか？」

「アーツの考えてる事なんてどうでも良いわ。暇つぶしにはちょうど良いのよ。」

「お嬢様が良いと仰るなら……。」

スペルカード1つ作るのにかかる時間はなんと…… 1分!!

お手軽に作れて直ぐに遊べるぞ！

「咲夜、少し相手になりなさい。加減はするから大丈夫よ。取り敢えず今作つた一枚だけを使うわ。それじゃ行くわよ！」

「かしこまりました。」

レミリア vs 咲夜（練習試合）

『貴方には避けきれるかしらね。呪詛「ブラド・ツエペシユの呪い』
!!!

レミリアが詠唱すると、沢山の弾幕が咲夜を襲つた。弾は左右に動き、非常に避けづらい動きをしている。

「流石はお嬢様です。ですが、全力で避けさせてもらいます！」

彼女は弾の一つ一つの隙間をギリギリで避け、レミリアのスペルが時間切れになつた。

「あらら、全部避けられちゃつた。私の負けね。」

「またいつでも喜んでお相手します。私もスペルカードを作らなくてはなりませんね。」

「今度はさつきのようにはいかないわよ。」

「弾幕ごっこは彼女達の中で大そう流行つたのであつた。」

弾幕ごっこは彼女達の中で大そう流行つたのであつた。

17話 リベンジ

次の日の朝、魔理沙はもう一度紅魔館を探しに行つた。ただ闇雲に探すのではなく、今度は当てがあるらしい。（確か湖の近くだつたよな。ならアイツに聞くのが手つ取り早いか。）

霧の湖まで来た彼女は大きな声で名前を呼んだ。

「おーーい！ チルノー！」

その声は湖中に響き渡り、しばらくすると彼女はやつてきた。
「このあいだのまほうつかいじやないの！ あたいになにかよう？」

「紅魔館っていう真っ赤な屋敷を見たことあるか？ この辺にあるらしいんだ。」

「あかいやしき… みたわ！」

「本当か？ その場所を教えてくれ！」

「そのかわりあたいとしようぶしなさい！ こんどはほんきでやつてやる！」

「仕方ないな。なら今回も勝たせてもらうぜ！」

チルノ vs 魔理沙

スペルカードはお互い2枚で戦うことになった。

『まえみたいによけられるとはおもわないことね！ 氷符「アイシクルフォール」Normal !!』

前回の反省を生かし、正面にも沢山の弾幕を放つた！

「中々いい感じになつてるじゃないか。だけど、まだまだ甘いな！」

魔理沙は弾幕を次々と避け、まだ余裕だという顔をしていた。

『ぐぬぬ…。まだまだこれからよ！ 凍符「パーフェクトフリーズ』Normal !!』

今度はカラフルな弾幕がチルノから放たれた。

「中々綺麗な弾幕だが、これくらいじや——！」

そう、なんとこの弾幕は突然止まつたのである！それだけで終わるはずもなく、氷の弾幕が彼女に降り注がれた。

「なるほど、最初の弾幕は凹つてことか。私を騙そうとしたつて無駄な事よ。動かないなら無視してしまえばいい！」

その時、チルノはニヤリと笑みを浮かべた。

（何だあの表情は…。作戦がバレて余裕こいてる暇なんて…っ！）

さつきまで止まつていた弾幕が突然動き出したのである!!
これには魔理沙も驚きを隠せなかつた。

「だんまくはとまつてうざかない？ちがうわ。こおらせてとめておいたのよ。さあ、これでおわりよ！」

動き出した弾幕が次々と襲いかかる!!はずだつたが、魔理沙のスペルカードによつてかき消されていた。

『恋符「マスター・スパーク」切り札つてのは最後まで取つておくもんだぜ？』

チルノのスペルカードを攻略した魔理沙は勝利した。

「こんどこそかつたとおもつたのに！」

「正直負けたと思つたよ。チルノはこれからもつと強くなるはずだから、その時にまた弾幕ごつこをやろうぜ。」

「もつとおどろくようなすつぎいのをくらわせてやるからおぼえてろよ！」

そういうつてチルノはどこかへ行つてしまつた。

「あつ、いけね！紅魔館の場所聞くの忘れてた！」

18話 魔法使い

紅魔館への行き方がわからない魔理沙は、しばらく考え方をしていた。すると、湖から何やら人魚のような姿をした妖怪が現れた。

「こんな場所をさつきからウロウロして何か用でもあるの？道にでも迷ったのかしら。」

「うおっ、人魚だ！ 紅魔館つていう真っ赤な屋敷を探しているんだ。何か知っているか？」

「ああ、この前急に現れた屋敷ね。それならここを右に曲がって真っ直ぐ進むと着くよ。どうしてそこに行くの？」

「なに、ちょっとした見物さ。情報ありがとうございます。この札はまだどこかでな！」

そう言うと彼女はささつと飛んでいった。魔理沙は人魚に言われた通り進んだ。

（やつと紅魔館にたどり着いたのは良いんだが、門番がいるみたいだな。）

どうやつて入ろうか悩んでいた彼女は、ガサゴソと帽子の中から魔法アイテムを取り出した。

「透明マント～！」

説明しよう！ 透明マントとは、文字通り被れば透明になれる道具である。ただし、喋つたり音を出してしまえばバレてしまうぞ！

（さて、行きますか。門番には悪いけどここは素通りさせてもらうぜ。）

気配も消えているため、相手には気づかれない便利な魔法アイテムである。

魔理沙は門の上を搔い潜り、入り口の妖精メイドの後ろについていった。

（入ったは良いが、中はかなりの広さだな。何処から調べようか…。）

ふらふらと歩き回つていった彼女はある事に気がついた。

（魔力の痕跡がある……かなり強力な魔力だ。とりあえず辿つてみるか。）

それは屋敷の地下まで続いており、一つの大きなドアの前まで続いていた。ドアを開けると部屋中に本が並びつくされていた。

（おいおい、この量は多すぎだろ。まるで図書館じやないの。それにしても部屋の構造がおかしい……一体どうなつてているんだ？）

魔理沙は目の前に広がる光景に信じられないという様子だった。

「あら、この世界の魔法使いが来るとは珍しいわね。」

（バレている……！？ 声は出していないのにどうして……。）

一瞬で正体を見破られてしまい、心臓が高鳴る魔理沙。

「随分と恥ずかしがり屋さんなのね。そんな玩具を着て隠れても私には見えているわよ。」

隠れても無駄と分かった彼女はマントを脱いだ。

「私の自信作を玩具とは流石大魔法使いだな。恐れ入つたぜ。」

「とにかく私の読書の邪魔をしないで頂戴。今引き返せばなにも見なかつた事にしてあげるわ。」

「分かつたよ。つて言いたいところだが、相手が魔法使いなら話は別だ。どちらが魔法使いとして優秀か勝負してもらう！」

「後もう少しで読み終わるから待つてなさい。その後なら何度でも叩き潰してあげるわ。」

19話 実力差

魔理沙は彼女が本を読み終わるのを待っていたが、ただ待つのも暇なので自分も読書をする事にした。

(此処には沢山の魔道書があるらしいな。少し見てみようか……)

「賢者の石について」という本を見る事にした。

作者：パチュリ・ノーレッジ

賢者の石とは、簡単に言うと便利な道具である。卑金属を金に変えたり、寿命を延ばす事もできる。人間はこれをとても貴重な物として觀てているらしいが、私にとつては石ころ同然の価値だ。

「賢者の石の価値が石ころと同じだつて!? パチュリ一つてやつは一体どんなやつなんだ……」

「それを書いたのは私よ。そんな石なんていくらでも作れるわ。」

パチュリーは彼女の目の前で賢者の石を沢山作りだした。

「こいつはすげえや! 私が勝負に勝つたらこの石は貰つてくれ。」「欲しいなら持つて行きなさい。さつさと終わらせるわ。」

パチュリーのスペルカードは4枚、魔理沙は2枚で勝負をする事になった。

パチュリー vs 魔理沙

『先手は私が貰うわ。火符「アグニシャイン」!!』

なんと、本の中から沢山の炎の弾幕が放たれたのである!
「おいおい、何で本が燃えないんだよ! つてか熱つ!」

魔理沙は熱い炎の弾幕をグレイズした。(グレイズとは、弾をギリギリで避ける。かすめることである。)

『この本は特別なのよ。熱いのなら冷ましてあげるわ。水符「プリンセスウンディネ」!!』

今度は泡の弾幕とレーザーが彼女を襲う!ダメ押しをするかのようになり巨大な弾幕も打つてきたのである!

『おいおい、このままじゃ避けきれずにピュつちまうぜ……な

らここで使うしかないよな！魔符「スター・ダスト・レヴアリエ」!!』

魔理沙は物凄いスピードでパチュリーの背後に回り、魔法アイテ
ムの八卦炉を取り出した。

『この至近距離なら避けられないだろう！食らつてくたばれ！恋
符「マスタースパーク」!!!』

魔力全快で放たれたマスタースパークは大図書館を丸々飲み込
むくらいの勢いだった。だが、真正面からくらつたはずのパチュリー
がピンピングしていった。

「な、なんでそこに立っているんだ……？完全に当たつたはずだ
ぞ……」

「その程度の魔法なんて避けなくともいいってことよ。残念だけ
ど、あなたの負けね。」

「そんな……私の魔法が通じないやつなんているのかよ……」
魔理沙は自信があつた魔法を簡単に破られてしまい、かなり
ショックを受けていた。

「人間にしては大したものだわ。少しごつくりしちやつたもの。
私は生まれついての魔法使いだから、差があるのは当然なの。」
「それでも負けた事には変わらないぜ。また勝負してくれ。い
や、してください。」

「いつでも待っているわ。私も試したい魔法がいくつかあるも
の。」

こうしてパチュリーと魔理沙の決闘はおわった。

20話 お泊まり

あの後魔理沙は家に帰り、勝つ為にもう1人の魔法使いの家へ向かつた。家は同じ魔法の森にあり、ご近所さんである。

名前は、アリス・マーガトロイド と言う。人形を作るのが得意で、複数の人形を魔法の糸で操ることができる。人里では偶に人形劇などをしたり、人形を作つて販売などをしている。

コンコン

「おーい、アリス～！ いないのか～？」

返事がない。留守のようだ。

「肝心な時にいないなあ。さて、何処へ探しに行こうか…。」

彼女がしばらく考えていると、ドアが開いた。中から出て来たのは可愛い人形だつた。

「おっ、さてはアリスの新作だな。アリスは何処に居るかわかるか？」

人形は首を振つて分からぬといつた様子だ。どうやら留守番を任せられているらしい。

「なら私も留守番しといてやるか。待つのには丁度いいや。」

彼女は人形としばらくのんびりと過ごしていた。あまりにも快適だつた為、つい寝てしまつた。

「あらあら、魔理沙つたらぐつすりと眠つているわね。何か用でもあるんだろうけど、しばらくそつとしておきましようか。」

アリスは彼女にそつと毛布をかけ、静かに読書をしていた。

それから数時間が経ち、魔理沙は起きた。

「……お、戻つて来たのかアリス。何処に行つてたんだ？」

「人里へ仕事とお買い物よ。これから夕飯だけど、食べる？」

「もうそんな時間なのか。ついでに泊まつていくよ。魔法について教えて欲しい事もあるしな。」

「わかつたわ。私は夕飯の支度するから貴方は先にお風呂入つてなさい。」

魔理沙はお風呂で今日の疲れを癒した。

(生まれついての魔法使い……か。何から今まで桁違いだつたな。)

考え方をしながら食事をすませていると、彼女が不思議そうな顔で魔理沙の顔を見ていた。

「ん? 私の顔に何かついているのか?」

「そうじゃなくて、悩んでいそうだつたから少し心配したのよ。何かあつたの?」

「すっげえ強い魔法使いにあつたんだ。パチュリって言うんだけど、私のとつておきが全くもつて効かなかつたんだ……。」

「貴方がここまで言うなんてよっぽどなのね。何か弱点みたいなものは無かつたの?」

「弱点つていう弱点は見当たらなかつたな。気になる点といえば、本気で戦っているのに使つてくるスペルはそこまで強く感じないんだ。」

「そんな珍しい事もあるのね。貴方が避けるのが上手いのか、それとも何か理由があつて弱くなっているのかも。」

「とにかく私がもつと強くならないとわからない事だ。つて事で練習相手になつてくれ。」

「今日はもう遅いから明日ね。ベッドは2階にあるから自由に使つて頂戴。おやすみなさい魔理沙。」

「おやすみアリス。」

21話 不穏な動き

次の日の朝、アリス達は弾幕ごっこを始めていた。魔理沙の激しい攻撃にもかかわらず、彼女は余裕の表情で避けていった。

「どうして私の弾幕が一つも当たらないんだよお～!!」

「がむしゃらに攻撃してはだめよ。しつかりと集中して狙いを定めないと当たるものも当たらないわ。こんな風にね。」

アリスは何体かの人形を取り出し、魔理沙に向けて放った。

「ホーミング機能が付いているのか。なかなか便利な技だけど、潰してしまえば問題ない！」

彼女は襲いくる人形の一体をレーザーで攻撃した。

ドガーンッ!!

なんと、レーザーに当たつた瞬間に爆発したのである。ただ爆発するだけでなく、さらにそこから弾幕が出てきたのである。

「な、危ねえっ！ただでさえ爆風で体制が崩れるって言うのに。これはかなり手強いぜ……」

「それだけじゃないわ。周りをよく見て、いらっしゃい。」

「こ、これはつ――」

爆発で周りを攪乱しているあいだに糸で結界を張り巡らせていたのである!!!

「ふふ、どうやらこれには驚いたようね。貴方にはこれを破ることができるかしら？」

「動けば糸に絡まり、動かない人形の爆発で終わるってことか。だが、ここで負けを認めるわけにはいかない！」

そういうと魔理沙は魔力を全開にした。

『結界もろともぶち抜くぜ！恋符「ノンディレクショナルレーザー」!!』

彼女ががスペルを発動すると、全体に5つの色鮮やかなレーザーが放たれた。そのレーザーで糸と人形達を破壊し、さらに星の弾幕でアリスに追い討ちした。

「へえ、この状況を難なくクリアするとは中々やるじゃないの。少し本気を出そうかしら——」

反撃しようとしたが、どこからか何者かに見られている気配がして一瞬動きが止まつた。その後、魔理沙の弾幕に当たつてしまい勝負に負けてしまった。

「最後のは一体どうしたんだ？ 勝負の最中に余所見なんてアリスらしくないじやないか。」

「少しきになることがあつて、ね。」

彼女はそう言うと、人形を木の茂みに放り込んだ。

「「うわあつ！」」

突然目の前に3匹の妖精が現れたのである。

「ちょっと、サニー！ 驚いて能力を解かないでよ！」

「なによ！ 貴方こそ音が消えてなかつたんじゃないの！ ドジ！」
「サニー、ルナ、2人とも落ち着いて。どつちもドジなのは変わらないんだから、今は逃げることに集中しなさい。」

サニーミルク 彼女は三妖精のなかでリーダー的存在であり、「光を屈折させる程度の能力」を持ち合わせている。単体でも使えるが、組み合わせで更に強くなる。

ルナチャイルド 彼女も能力持ちで、「音を消す程度の能力」がある。一部の音だけを消すこともできたりもする。月の光に強く影響される。

スターサファイア 「動く物の気配を探る程度の能力」を持つている。相手が全く誰かわからないのが欠点だが、広範囲で使える探知機の役割をしている。

そうだったと現状把握し逃げ出そうとする2人だつたが、すでに魔理沙達に包囲されていた。

「またお前達か。悪戯するなら他所に行つてくれ。今は忙しいんだ。邪魔するなら相手になるけど？」

「まあまあ、見ていたのがこの子達なら問題はないわ。何か殺氣のような物を感じ取つたのだけれど、気のせいみたいね。それよりお茶にしましよう。貴方達も食べていきなさい。」

「「はーい！」」

お昼は妖精達とお菓子を食べて過ごしていた。

一方その頃、紅魔館ではある出来事に悩まされていた。：